

医療 と 哲学

第57回

日本人の死生観と 今求められるグリーフケア

上智大学大学院実践宗教学研究科教授・
同グリーフケア研究所所長
島 蘭 進

「グリーフケア」の語が 身近になる過程

日本の大学でその名に「グリーフケア」を掲げている機関は、上智大学グリーフケア研究所だけだろう。その上智大学グリーフケア研究所は2009年に聖トマス大学に設立され、翌年、上智大学に移管されたものである。設立の背景には、2005年に起こったJR西日本福知山線の脱線事故があった。それに先立つ1995年の阪神淡路大震災の記憶も関西の人々の心に残っていた。関東では2011年の東日本大震災によって、グリーフケアという言葉が急速に広まるようになった。

2009年は滝田洋二郎監督、小山薫堂脚本、本木雅弘主演の映画「おくりびと」が第81回アメリカ・アカデミー賞外国語映画賞を受賞した年である。「おくりびと」とは死者の顔やからだを美しく整え、あの世への旅立ちの装束をつけて棺に納める仕事を請け負う業者を指すものだ。作品では、「おくりびと」が行う「死」の儀礼の描写が、反復されるハイライト・シーンになっている。死のタブーを背負われ、社会の片隅に追いやられがちな存

在がヒーローとなる。死を正面から見つめることが促されていると解釈するのは自然である。

絆の回復と故郷

「おくりびと」は全体として、荒々しく残酷な死の衝撃を語るとともに、葬送儀礼の軽視されてきた側面がもつ美的な力により、死の衝撃が克服されうることを語っている。だが、それとともに、死を経ることで親子の根深い葛藤が克服されうること、そして家族の絆が回復されうることを示唆している。

劇中ツヤ子の息子は、母を送るとき母の意思に反し、争い続けてきたことを激しく悔いて、「母ちゃん、母ちゃん、ごめんの、ごめんの」と繰り返し母に許しを乞う。他の葬送の場面でも、度々和解への歩みが示唆されているが、その楽観性に違和感を覚える人もいるだろう。しかし、多数の観衆はそこでほっと涙を落とす。

この作品はまた、故郷の復興を希望的に語ってもいる。死にゆく人の旅立ちは鳥海山を背景とした白鳥たちの飛翔のように美しい。それはまた、